

## 受難節第5主日礼拝説教「祈りの奉仕へ」

日本基督教団石神井教会 2019年4月7日

### 【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 5章1～10節

<sup>1</sup>大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています。<sup>2</sup>大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているのです。無知な人、迷っている人を思いやることができます。<sup>3</sup>また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分自身のためにも、罪の贖いのために供え物を献げねばなりません。<sup>4</sup>また、この光栄ある任務を、だれも自分で得るのではなく、アロンもそうであったように、神から召されて受けるのです。

<sup>5</sup>同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、「あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ」と言われた方が、それをお与えになったのです。<sup>6</sup>また、神は他の個所で、「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」と言われています。<sup>7</sup>キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。<sup>8</sup>キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。<sup>9</sup>そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、<sup>10</sup>神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。

### 【福音書日課】ルカによる福音書 20章9～19節

<sup>9</sup>イエスは民衆にこのたとえを話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅に出た。<sup>10</sup>収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を納めさせるために、僕を農夫たちのところへ送った。ところが、農夫たちはこの僕を袋だたきにして、何も持たせなくて追い返した。<sup>11</sup>そこでまた、ほかの僕を送ったが、農夫たちはこの僕をも袋だたきにし、侮辱して何も持たせなくて追い返した。<sup>12</sup>更に三人目の僕を送ったが、これにも傷を負わせてほうり出した。<sup>13</sup>そこで、ぶどう園の主人は言った、『どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』<sup>14</sup>農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』<sup>15</sup>そして、息子をぶどう園の外にほうり出して、殺してしまった。さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。<sup>16</sup>戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」彼らはこれを聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。<sup>17</sup>イエスは彼らを見つめて言われた。「それでは、こう書いてあるのは、何の意味か。

『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。』

<sup>18</sup>その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」<sup>19</sup>そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと感じたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。

## 祈り願う務め

今日の「週報」から、新年度の標語聖句・ローマの信徒への手紙 12:12「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」を表紙に掲げています。わたしたちが、これから始まる一年間、教会の歩みの中で心に留め、繰り返し聞き直していくために、ここに掲げました。すでに、先週発行の「あゆみ」にも、この御言葉を巡っての一文を寄せさせていただいています。目新しいことのない聖句かもしれません。「たゆまず祈りなさい」と勧められています。使徒パウロの同じような勧めの聖句をいくつも思い浮かべられる方もあるでしょう（コロ 4:2、1テサ 5:17 など）。主イエスが、受難週の日々の中で、あるいは最後の晩に弟子たちを連れてゲッセマネの園で祈られたときに、「いつも目を覚まして祈りなさい」（ルカ 21:36）、「誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい」（ルカ 22:46）とおっしゃられたことも、思い起こします。主イエスも、使徒たちも、教会の諸先達も、わたしたちに、「たゆまず祈ること」を教えています。

ルカ福音書に導かれて主イエスの十字架への道行きに伴わせていただいて来たわたしたちは、誰よりも主イエスこそがいつも祈っていらっしゃる方であったことを強く印象付けられてきました。主イエスは、いつも祈っていらっしゃるのです。しかも、どこでも祈っていらっしゃった。弟子たちが傍らにいても、人々が押し寄せてきても、主イエスはいつも、いわば「祈りの人」としてそこにいらしたのではなかったでしょうか。そのような方として主イエスのことを弟子たちが伝えたからこそ、福音書は、「祈りの人」としての主イエスの姿を随所に語るようになったのでしょうか。

その主イエスが、ご自身の祈りについてお語りになられたことがありました。最後の晩餐の席でのことです。弟子たちに語りかけて、ことに一番弟子のシモン・ペトロまでも裏切ることになるとお告げになられながら、主イエスはおっしゃられたのです。「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちをカづけてやりなさい」（ルカ 22:32）。

「祈りの人」として弟子たちにそのお姿をお示しになられていた主イエスの祈りは、ずっとこの祈りだったのではないのでしょうか。弟子たちのために祈る祈り、とりなしの祈り、です。

今日の使徒書日課（ヘブライ 5章）で、主イエスは、わたしたちのために罪の贖いを献げてとりなし祈る「大祭司」の務めを担ってくださっているのだと、教えられています。「大祭司キリスト」です。けれども、その祈りは、威厳に満ちた朗々としたすばらしい祈りだったとは、言われていません（私たちは、そういう祈りを誉めそやすのですが）。主イエスは、「**激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いをささげ**」（ヘブ 5:7）られたのだということです。それが「大祭司」としてわたしたちのためにとりなし祈られた主イエスの祈りの姿だった、ということです。

この祈り願う務めは、しかし、主イエスだけのものではないでしょう。これは、教会の務め、わたしたちの務めでもあると、使徒は勧めているのです。

## 神のぶどう園

わたしたちも、家族や親しい者のために、あるいは教会の仲間のために、しばしば祈ります。困難の中にある者が身近にいれば、わたしたちは、できれば手助けをしたいと願いながらも、実際には陰ながらとりなし祈ることしかできないことが、本当に多いのです。祈るしかできない、けれども、祈ることができる。それは、自分のための祈りよりもむしろ、愛する者のための祈りにおいてこそ言えることではないでしょうか。

愛する者のために祈ることを、わたしたちは知っています。愛する者のためならば、わたしたちは、心を砕いて、時を割いて、祈るものでしょう。けれども、わたしたちの知っている祈りは、何だかんだと言っても、愛する者のための祈りに留まっているようにも思います。

主イエスは、わたしたちに、「自分を愛してくれる人を愛したところで…どんな恵みがあるか」(ルカ 6:32)とおっしゃられて敵を愛することをお教えくださり、「悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい」(ルカ 6:28)とお命じになられたのです。自分の愛する者、自分を愛してくれるもののために祈るだけではなく、敵のため、愛し合うことのできない相手のためにも祈るように。それは、もちろん、主イエスご自身が、そのような祈りに生きられた方でいらしたということでしょう。ヘブライ 5章で、主イエスの祈りが、激しく叫び声を上げ、涙を流しながら、死からも救うことのおできになるお方に向けての祈りであったと言われるのも、そのような者たちをもとりなす祈りであったからこそこのことではないでしょうか。

わたしたちは、日常生活の中で、どれだけそのような祈りをささげることができているだろうかと思います。しかし、それぞれの日常生活を問う前に、わたしたちの教会は、そのような祈りをささげる群れとなっているだろうか、思い返してみなければなりません。

福音書日課(ルカ 20章)で、主イエスは「ぶどう園」のたとえをお語りになられていました。「ぶどう園」は、聖書では古くから「神の民」をととえるために用いられてきました。教会も、「神のぶどう園」とたとえられてきました。

主イエスは、何とも不穏な空気に包まれたぶどう園を、たとえとして語られました。農園主が農夫たちに貸し与えたぶどう園。その収穫を納めさせるために派遣されてきた僕や息子が、農夫たちに拒まれ、挙句の果てには殺されてしまう。それに対して農園主は、どのように行動するだろうか。そう、主イエスはこのたとえで問われました。農園主の僕や息子を拒んだ農夫たちは、殺されてしまうだろうというのです。

なぜ、このようなたとえを主イエスはお語りになられたのでしょうか。これを聞いていた律法学者たちや祭司長たちは、これが自分たちへの当てつけだと考えて、主イエスに対する敵意を深めました。主イエスは、わざわざ敵意を向けてくる者たちを刺激して、ご自分に対する攻撃を強めさせようとなさったのでしょうか。そうだとは思えないのです。

## ぶどう園は「ほかの人たち」に与えられる

主イエスが彼ら敵意を向けてくる者たちを刺激し、煽っているとしたら、「敵を愛しなさい」との教えと矛盾します。真意は、他のところにあるはずです。

主イエスのたとえの結末は、何とも奇妙なものです。実際に、このような結末になるのだろうかと思います。これを聞いていた人たちは、「そんなことがあってはなりません」と反応していますが、それは、何を指して言っているのでしょうか。農夫たちが僕たちを拒み、主人の息子を殺してしまったことでしょうか。主人が怒って農夫たちを殺してしまったことでしょうか。あるいは、農夫たちを殺した後、主人がまたもや、このぶどう園をほかの人たちに与えるということをしたことでしょうか。

おかしな言い方かもしれませんが、このぶどう園は、死を招くぶどう園です。僕たちは侮辱されるところで済んだようですが、主人の息子は農夫たちに殺されてしまいました。農夫たちも、主人に殺されてしまいます。このぶどう園のために働いた者は皆、死を招くことになったのです。その結末は、全く関係のない新しい「ほかの人たち」がぶどう園に招かれて、そこを与えられるのです。

皆さんは、もしかすると、この最後にぶどう園に招かれた**ほかの人たち**が、自分たちのことを指しているとお考えでしょうか。確かに、そういう解釈もできます。このたとえを聞いたユダヤ人の律法学者たちや祭司たちが殺意をいだいたように、このぶどう園の最初の**農夫たち**はユダヤ人を指していて、**ほかの人たち**というのは罪人や異邦人を指しているのだということです。けれども、皆さんは今、どこにいるのでしょうか。教会です。「神のぶどう園」に、すでにいるのです。そうだとしたら、皆さんは、このたとえの中の、最初の農夫たちであるか、主人のもとから派遣される僕たちであるか、主人の息子であるか、そのいずれかでしょう。そして、そのいずれの者も、ひどい目に遭うか、殺されてしまうのです。

「神のぶどう園」の教会がそんなにひどい所だったのならば、もう来るのはやめよう、と皆さんは思われますか。でも、主イエスは、そのぶどう園においでくださったのではなかったでしょうか。このぶどう園こそが、主イエスの遣わされたところだったのではなかったでしょうか。このぶどう園が実を結び、神のもとに収穫が届けられるようになるために、主イエスは遣わされ、殺されたのではなかったでしょうか。死ななければならなかったのです。

わたしたちは、「神のぶどう園」に招かれた者として、あの農夫たちのようにふるまうのか、主人のもとから遣わされた僕のようにふるまうのか、それとも、主人の息子のように生きるのか。いずれにしても、ここに招かれた者は皆、主イエスと共に死ななければならぬのです。新しく「ほかの人たち」が招かれてくるためです。「ほかの人たち」にぶどう園が与えられるためです。彼らも、ぶどう園の豊かな実りの収穫にあずかるようになるためです。

ここに、わたしたちの祈りがある。主イエスが始めてくださったとりなしの祈りの場がある。命をかけて、とりなし祈るのです。後の者たちのために。神の子と呼ばれるようにされた者として、主イエスと共に、とりなし祈るのです。